

平成 26 年度（2014 年度）第 1 回運営委員会記録

豊中市教育センター

日 時 平成 26 年（2014 年）6 月 23 日（月）

会 場 豊中市教育センター 研修室 1

出席者 高橋委員、山崎委員、安川委員、酒井委員、寺本委員、冬木委員、
多田委員、岡井委員

欠席者 藤本委員、川崎委員、大野委員、渡邊委員、井坂委員、越桐委員、
柿本委員

事務局 林所長、野村チーム長、高島チーム長、田中チーム長（記録：正岡）

傍聴者 0 名

○委員紹介

○所長挨拶

・教育センターの業務について忌憚ないご意見をいただきたい。

○委員長・副委員長の選出

1. 開会の挨拶（委員長）

・教育センターの運営がより良いものになるよう、多くの意見をいただきたい。

2. 案件

（1）本年度の教育センターの組織・運営について（事務局）

・組織の概要

・組織の運営

①人材育成について

②学校教育活動支援について

（2）本年度の事業計画について（事務局）

○教育計画チーム

研究・研修グループ

・学校教育の研究・調査に関すること

・教職員の研修に関すること

情報・科学グループ

・情報教育に関すること

・科学教育に関すること

・教育情報の発信に関すること

・市民対象の教育に関する講座に関すること

○教育相談チーム

・教育センターにおける教育相談に関すること

- ・学校への教育相談員派遣に関する事
- ・教育相談窓口での電話相談に関する事
- ・サポート会議に関する事
- ・教育相談に関わる研修に関する事

○支援教育チーム

- ・支援職員配置事業に関する事
- ・学校園支援事業に関する事

【質疑・意見】

- ・人事権の移譲に伴い研修権も移譲されましたが、豊中市独自の研修実施の利点と課題を教えてください。
→教育力の向上に力を入れております。特に教科にかかわる研修については細かく広く研修を実施しており、豊能地区の先生方からも多くの参加があります。
課題としては、国や府の動向が分かりづらくなることが挙げられます。そのため情報をいち早く収集し、それに見合う研修を実施することが必要と考えております。また、少数職種・少数教科に関わる研修の実施も課題の一つとしてあります。学校事務職員研修については、本年度から府実施の研修にも人数制限はありますが、参加できるようにしました。養護教諭についても、保健体育チームと連携を密にしながら、府から情報を提供してもらえよう働きかけ、研修の充実を図りたいと考えています。現場からの要望があればお知らせください。
- ・現場では世代交代の時期になっており、10年経験者研修を受講する方が増えています。必修研修や選択研修があるようですが、豊能地区ではどのようなになっているのでしょうか。
→ 現在、豊能地区実施の必修研修が6回、豊中市実施の必修研修が3回、選択研修が8回となっております。10年目の先生方は、学校内で中心的な存在となっているなか研修に参加いただいています。夏季休業中を中心に選択研修を行い、昨年度からは大阪人権教育の研究大会への参加も選択研修の一つとしています。研修参加後は簡単な報告書の提出をお願いしています。また、本年度から選択研修については、参加時の押印も不要とするなど事務処理の軽減にも取り組んでいます。
- ・魅力ある内容の研修が揃っておる一方、学校園で参加しやすい状況を作らないと参加は難しいと思います。日々の対応に追われるのが現場の現状であり、自由参加の研修では希望が出にくいことが学校側の課題です。
- ・経験の浅い先生対象に人間力の向上を目的とする研修を実施する計画はありますか。
→人間力の定義については、さまざまな考え方があるとは思いますが、その一つとして研修の形を、講義を聞くだけでなく、グループの中で意見を出し合うといったように、より主体的に参加する形の研修を増やしています。研修講師にも、前半は講義で問題提起をし、後半はワークを取り入れる、といった流れでお願いをしています。後半のワークでは教員がお互いに学び合い、お互いの実績を伝え合い、それを感じ合うことで力を付けていくことをねらっています。加えて、研修の終わりには必ずふりかえりを行い、研修で学んだことをどう生かすのか、交流する機会を持つようにしています。研修を、教員同士、特に若手とベテランがコミュニケーションをしっかりとることによって、それぞれの良さを学び合う場としています。
- ・人間力というと大変で、まず、社会人として初めに学ぶべきこともたくさんあり、それを研修という形に取り

入れるのは難しいかと思えます。

→研修の中で講師から、教師は教育の方法を問われることが多いが、それと同時に教育に対する考え方や教師としての在り方、といったことを大事に学んでいかなければならない、といった話がありました。教育センターでも授業づくりや単元をどう教えるのかといった内容の研修とともに、子どもの見立てや子ども理解、教師として何を大切にすべきか、といった内容の研修を取り入れていき、参加の先生方に考えていただきたいと考えています。

・現場に介助員の配置があり非常に助かっています。一緒に子ども達に関わるうえで非常に大切な存在となっておりますが、現場の要請に対して十分な数の介助員が配置されているのでしょうか。また、医療的ケアが必要な子どもに対して看護師の配置も適切に行われているのでしょうか。

→介助員については、年々人数が増えていっており、1校に1人、59名の介助員がいます。その配置については、学級設置の兼ね合いもあり、それぞれの状況に合わせて配置しており、配置がない学校もあれば、1校に2人配置している学校もあります。看護師の配置については、制度として安定しない面もあるが、6月までは適切に配置できています。

3. 閉会の挨拶（副委員長）

・先日、2011年6月以降の3年間、小・中・高校生の子どもの自らの命を絶ったケース500件の背景を文科省が公表したという報道がありました。いじめが背景にあったものが約2%、進路に関わることが約12%でした。約12%という数字から、子ども達が育っていく中で進路というものがとても大きな要因になっていることがわかります。また、不登校が10%、学習面が7%、友人関係が8%というように、学校生活の中での要因も進路と同じく大きな割合になっています。何よりも、この3年間で500人の子どもが自ら命を絶っている事実があることが衝撃的でした。また、家庭内の状況でいうと、保護者との関係性に起因しているものが10%、経済的な要因が5%、と、子ども達の取りまく状況が、学校でも地域・家庭においても、大変厳しいものになっていると改めて感じました。

豊中市では2013年4月に「子ども健やか育み条例」が制定され、その中で「子どもは生まれながら一人ひとりがかけがいのない存在である」と位置づけられており、一人で悩んでいる子ども達や、社会的な援助が必要な子ども達については、関係機関が連携し、それぞれの立場から総合的な支援をするべきだ、とあります。これは昨年4月1日から施行されたもので、子ども達が自ら命を絶つ背景を理解し、一人ひとりの子ども達を大事に大切にしていこうという姿勢で、学校・家庭・地域が連携して支援体制を整えることが必要であると考えます。そのためにも、今日説明のあった各チームがそれぞれの分野の中で、どのように教職員や地域、保護者に訴えていくのか、示していくのが重要なことになるのではないのでしょうか。

今後とも意見を交流しながら、運営委員会が教育センターのさらなる業務の推進につながる場であって欲しいと願っています。